

# B・フィアテルの『カール・クラウス』

—— ユダヤ的預言者像の意義 ——

小 林 哲 也

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第39巻第2号 (抜刷)  
2020年3月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 39 No. 2 March 2020

# B・フィアテルの『カール・クラウス』

—— ユダヤ的預言者像の意義 ——

小 林 哲 也

## はじめに

ウィーン出身のベルトホルト・フィアテル（1885-1953）は、ドイツ語圏のユダヤ系知識人の中で著名とは言い難いが、劇作家・映画監督として生前はその名を知られていた<sup>1)</sup>。フィアテルは、ウィーンの風刺家カール・クラウス（1874-1936）の雑誌『ファッケル』に詩を寄稿して文筆活動を開始しており、クラウス研究においては彼の友人、賛美者、協力者としてしばしば言及される<sup>2)</sup>。青年期のメンターであるクラウス同様、オーストリア的な「心地よさ *Gemütlichkeit*」への安住に対して批判的な姿勢をとったフィアテルは、「反オーストリア的オーストリア人」と性格付けられる<sup>3)</sup>。本論では、批判的知識人と

---

1) ウィーン 10 区にベルトホルト・フィアテル・ガッセの名があるように、彼は歴史から消え去ってしまった存在でもない。1910 年頃からウィーンで劇作家として活動を始め、第一次大戦後は、ドイツ、イギリス、アメリカで劇作家のほか映画監督としても活動し、第二次大戦後ウィーンに帰ってきて 1953 年に没している。フィアテルは、没後しばらく文化史・文学史の中で語られることはそれほどなかったが、1990 年前後に「オーストリア亡命文学」研究の枠組みでその意義が「発見」され、四巻本の著作集が出されている。Vgl. Katharina Prager: Berthold Viertel. Eine Biografie der Wiener Moderne. Wien 2017, S. 19. プラーガーは、フィアテルの自伝的テキスト断片を再構成する形で彼の伝記的研究を行っている。

2) 例えば以下の論文で、クラウスの戯曲『克復されざるもの』のフィアテルによる上演について検討されている。Edward Timms: Karl Kraus, Berthold Viertel and Die Überwindlichen in Berlin. In: John Warren and Ulrike Zitzlsperger (eds.): Vienna Meets Berlin. Cultural Interaction 1918-1933. Bern 2005, pp. 51-64.

3) Felix Kreissler: Das fortschrittliche Österreichertum Berthold Viertels. In: Siglinde Bolbecher (Hg.): Traum von der Realität. Berthold Viertel. Wien 1998, S. 40-61.

して自己形成をとげつつあったフィアテルが、第一次大戦中に執筆・発表したカール・クラウス論<sup>4)</sup>を検討する。

フィアテルのクラウス論は、クラウスのユダヤ的預言者性を意義あるものとして描き出した先駆的著作としてクラウス研究において取り上げられてきた<sup>5)</sup>。第二次大戦後のクラウス研究では、第一次大戦の惨状、反ユダヤ主義とナチズム、ホロコーストを前提として、クラウスの諸々の批判がそれらを先見していたことが頻繁に論じられた。ここでは過去に遡ってクラウスの「預言性」が語られるのに対して、フィアテルはすでに第一次大戦の最中、クラウスが現在進行形ですすめた批評活動について、いわば手探りでその意義を論じた。

フィアテルがクラウスの「ユダヤ性」を強調したのは当時としては珍しいことだった。クラウスは、ユダヤ人ジャーナリストらへの攻撃ゆえにときに「反ユダヤ的」とさえ評されており、彼の「ユダヤ性」をポジティブに論じた批評家は、クラウスの生前ではヴァルター・ベンヤミン以外には皆無と言っていい。クラウスを中心として当時のユダヤ系知識人の布置を描いてみると、フィアテルはそこに独特の位置をしめている。本論では、フィアテルのクラウス論を、第一次大戦での経験を通じて生じたフィアテルのユダヤ・アイデンティティ再考に照らして検討する。フィアテルは、クラウスの「預言」的特質をマルティン・ブーバーの議論によって説明する一方で、ユダヤ民族のための使命とはとらえずに、遍く広がる悪からの改心という普遍的なものとしてとらえている。

---

4) 1917年にベルリンの雑誌『シャウビューネ』に分載して発表され、1921年にごくわずかな加筆・修正を加えて書籍として公刊された。本論では引用に際しては書籍版を用いる。Berthold Viertel: Karl Kraus. Ein Charakter und die Zeit. Dresden 1921.

5) Vgl. Alexander Lang: „Ursprung ist das Ziel“. Karl Kraus und sein „Zion des Wortes“. Frankfurt am Main 1998, S. 33.

## 1 クラウスとフィアテル——ウィーンのユダヤ人

1857年には人口50万人に満たなかったウィーンは、帝国の諸民族の流入もあって膨らみ、1910年には人口200万人を数え、当時有数のメトロポリスとなっていた。ユダヤ人も1848年の革命以後、移動制限が撤廃されたのにとまない移住を進め、19世紀末から20世紀初頭にかけては、ウィーンの人口の9パーセント弱を占めていた<sup>6)</sup>。一口に「ユダヤ人」といってもウィーンへ移住した時期や出身によってドイツ文化への同化の程度や社会階層には差異があった。クラウスとフィアテルは一回りほど年が離れているとはいえ、ほぼ同じ世代のウィーンの「同化ユダヤ人」であり、両親がウィーンに出てきた時期もそれほど違わない。しかし、両親の出身地の違いや、生育環境と生育期のわずかな違いが、両者の「ユダヤ性」意識の微妙な違いを生みだしており、フィアテルのクラウス理解を考える上で検討に値する。

クラウスとその両親が生まれたベーメン（ボヘミア）は、早くから大きなユダヤ人社会が存在した地域である。ヨーゼフ2世の「寛容令」以降、ハスカラー（ユダヤ啓蒙主義）の影響下に世俗的学校教育が導入され、19世紀に入ってからには世俗的教養層と工場経営者などが力を増していく<sup>7)</sup>。クラウスの両親はこうした世俗化・産業化の波にのった世代に属する。父ヤーコプは小都市イチンで、紙袋の製造・販売を行って成功した。会社はプラハやウィーンにも会社の支店を置き、オーストリアの外まで販売網を広げるなど順調に規模を拡大した。クラウスは9番目の子として1874年にイチンで生まれている。その3年後、父は商売の成功を十分に見込んだうえで、一家でウィーンに移住した<sup>8)</sup>。ク

6) 野村真里：ウィーンのユダヤ人——19世紀末からホロコースト前夜まで（御茶の水書房）1999, 11-12頁。

7) Christoph Lind: Juden in den habsburgischen Ländern 1670-1840. In: Eveline Brugger u. a. (Hg.): Geschichte der Juden in Österreich. Wien 2006, S. 339-446, S. 401f., 441f.

8) クラウスの父の会社は好不況の波にのまれることもなく、1900年の彼の死後も、ナチスによるオーストリア併合まで存続した。Paul Schick: Karl Kraus. Reinbek bei Hamburg 1965, S. 10ff.

ラウスの両親はウィーン移住時には、すでに十分「ドイツ化」しており、クラウスもごく自然にドイツ語とドイツ文化を身につけていった。

フィアテルの両親<sup>9)</sup>が生まれたガリツィアは、1772年ポーランド分割によってオーストリアに編入された。ハプスブルク帝国領で最大のユダヤ人口をかかえたガリツィア<sup>10)</sup>のユダヤ共同体は、キリスト教への改宗につながると考えてドイツ語世俗教育の導入を強く警戒し、その「ドイツ化」は進まなかった。ユダヤ人向けのドイツ語教育学校は1806年にすべて閉鎖され、ごくわずかの啓蒙派を除いた多くの住民はイディッシュ語を話し続けた<sup>11)</sup>。1860年に東ガリツィアのタルヌフのラビの家系に生まれたフィアテルの父ザーロモンは、ガリツィアを離れてウィーンへ移住し、家具商として成功した。彼は、ラビ家系という「ユダヤの良家」出自がもたらす信用も生かしながら、ガリツィアの職人とウィーンの顧客をつなぎ商機をつかみ、家具工場も経営して成功する<sup>12)</sup>

ブルジョア的成功をつかみウィーンに同化した家庭で育ったフィアテルにとって、ガリツィアからときおり現れる父の親戚は、衣服や容貌の違いから異様に映り、母も彼らの訪問を嫌った<sup>13)</sup>。ウィーンの間では、「ガリツィアからの遠さ」がある種のステータスをなしており、「ウィーン・ユダヤ人」の中核をなしていたハンガリーやペーメン経由のユダヤ人たちは、次第に数を増すガリツィア出身のユダヤ人たちを「ポーランド人」として見下していた<sup>14)</sup>

9) ガリツィアでのフィアテルの両親について詳しくは以下を参照。Prager, a. a. O., S. 129-138.

10) 1900年には、およそ81万人ほどのユダヤ人がガリツィアに住んでいた(ウィーンを含むニーダー・エスタライヒが16万人ほど)。Albert Lichtblau: Integration, Vernichtungsversuch und Neubeginn – Österreichisch-jüdische Geschichte 1848 bis zur Gegenwart. In: Eveline Brugger, a. a. O., S. 447-565, hier S. 461.

11) 野村真里: ガリツィアのユダヤ人 —— ポーランド人とウクライナ人のはざまで (人文書院) 2008, 68-76頁参照。1867年以降ポーランド人の自治権が強まったのにもなって、彼らは商売などではポーランド語を使用し、ドイツ語からはさらに遠ざかっていく。

12) Prager, a. a. O., S. 139f.

13) Ebd., S. 134f.

経済的成功をつかみ仕事上は間違いなくドイツ語を使用していたフィアテル家も、「ドイツ文化受容のヒエラルキー」においては、決して上層には位置していなかった<sup>15)</sup> フィアテルが、自身のユダヤ出自を意識させられる機会は、クラウス以上に多かったと考えられる。母方の祖父母はゲッターの雰囲気を残したレオポルトシュタットのユダヤ人街に住んでいた。すでにフィアテルにとっては異質な世界であったとはいえ、ガリツィアのユダヤ共同体と連続性をたもったユダヤ的生活の影は彼の周囲に存在し続けていた。

10歳ほど年長のクラウスが、反ユダヤ主義が広がる以前に少年期を終えたのに対して、フィアテルは少年期に、街や学校でも反ユダヤ主義的現象に遭遇していた。1890年頃はじめて学校へ通う途上、フィアテルは自分自身が「ユダヤ人の子供」であることを否応なしに意識させられた。

二人の少年が「ヘップ・ヘップ」と叫びながら私に飛びかかり、地面に投げ倒した。私は盲滅法の怒りの中で一人に飛びかかったが、気づくとそこにのびていて、石炭を積んだ荷車にあやうく轢かれるところだった。私は恐ろしい叫び声をあげた。私が自慢していた新しいカバンがひどいありさまだったからだ<sup>16)</sup>

---

14) ボヘミア出身の医師の父のもとウィーンに生まれ、後に коммуニストになったアルベルト・フックス (1905-1946) の回想による。アルベルト・フックス (青山孝徳訳) : 世紀末オーストリア 1867-1918 —— よみがえる思想のパノラマ (昭和堂) 2019, 15-16 頁参照。当時のウィーンについてのこうした印象は、社会学的調査などとも符合する。野村真里 : ウィーンのユダヤ人, 12-16 頁参照。

15) Prager, a. a. O., S. 162.

16) Berthold Viertel: Die Stadt der Kindheit. In: Siglinde Bolbecher und Konstantin Kaiser (Hg.): Kindheit eines Cherub. Autobiographische Fragmente. Berthold Viertel – Studienausgabe in vier Bänden, Bd. 2, Wien 1990, S. 73-129, S. 90. 「ヘップ・ヘップ Hep-Hep」の掛け声は、1819年のバイエルンでの「ヘップ・ヘップ暴動」で広く知られるようになったもので、ユダヤ人迫害の際にあげられる。この掛け声は「Hierosolyma est perdita エルサレムは失われた」に由来するものとされることが多いが、必ずしも明らかでない。Vgl. Christoph Lind, a. a. O., S. 410.

1890年代、ウィーンでは大衆的反ユダヤ主義が勢いを増していた。その反ユダヤ的演説が人気を博していたカール・ルエーガーが市長戦で勝利した1895年、フィアテルの父たちは、反ユダヤ政党へ投票した職人との取引をボイコットすることを決めている。この年フィアテルが通い出したギムナジウム（クラスのおよそ半数がユダヤ人だった）の教師には反ユダヤ的言動がしばしばみられた<sup>17)</sup> フィアテルはこの頃預言者のなものと神からの召命に惹かれ、旧約聖書の読書に熱中した<sup>18)</sup> この「幼年期の宗教性」が熱を失った時期に、彼はクラウスの雑誌『ファッケル』を読みふけるようになる。

## 2 クラウスとフィアテル——「ユダヤ性」への姿勢の比較

1890年代からジャーナリズムで活動を始めていたクラウスは、1898年、T・ヘルツルの主導するシオニズムを揶揄したパンフレット『シオンのためのクローネ』などでウィーンの問題をさらった後<sup>19)</sup> 「〈われわれは何かをもたらす bringen〉という心地よく耳に響く言葉ではなく、ごまかしのない〈われわれは何かを殺す umbringen〉をモットー」<sup>20)</sup> とした雑誌『ファッケル die Fackel [=たいまつ]』をかかげて現れ、センセーションを起こしていた。

『ファッケル』発刊後ユダヤ共同体を脱退していたクラウスの「ユダヤ教 [ユダヤ性] Judentum」への態度は必ずしも明確ではなく、その長い活動の中で変遷していくが、ユダヤ系ジャーナリズムへの批判は一貫していた<sup>21)</sup> 当時ウィーンの10パーセント弱の人口をユダヤ人が占めていたが、その多くが商

17) Prager, a. a. O., S. 184-186.

18) Ebd., S. 177ff.

19) Vgl. Günter Schütt: Karl Kraus und sein Verhältnis zum [Ost-] Judentum. Wien 2017, S. 186-213.

20) Die Fackel. Nr. 1 (1899), S. 1.

21) Vgl. Caroline Kohn: Karl Kraus und das Judentum. In: Günter E. Grimm und Hans-Peter Bayerdörfer (Hg.): Im Zeichen Hiobs. Jüdische Schriftsteller und deutsche Literatur im 20. Jahrhundert. Königstein 1985, S. 147-160, 147ff.

業、金融業、自由業（医師、弁護士、出版関係）に従事しており、出版業界、ジャーナリズム・著述業において大きな役割を果たしていた<sup>22)</sup> 彼らの多くはおおむね「自由主義」を信奉しており、ユダヤ人が創刊した新聞が彼らの利害を代弁していた。その代表格である『ノイエ・フライエ・プレッセ』を風刺家クラウスは名指しで批判していく。この批判は当時の反ユダヤ的言説とも一部共振することとなっていた。ジャーナリズム、特に文芸欄が「文化のユダヤ化」の象徴として論難されていたからである<sup>23)</sup> クラウスは、勃興する大衆的反ユダヤ主義も批判はしていたが、それを打ち消すほどに彼の「ユダヤ新聞」批判の印象は強く、「ユダヤ人の自己憎悪」の一例として受け取られることとなった<sup>24)</sup> さらにクラウスは、反ユダヤ主義者によって「アーリアタイプのユダヤ人」として評価されている<sup>25)</sup>

10代のフィアテルは一読者としてのみならず、個人的にもクラウスと知り合いになっており、『ファッケル』にいくつか詩を寄稿している<sup>26)</sup> フィアテルは、クラウスのユダヤ批判レトリックに関して俗物的利得根性の軽侮など現代文化批判的側面については見解を共にしていた。当時、資本主義や利得根性などに代表される「世俗化した近代の悪」を語る際に、ユダヤ批判的レトリック

22) ウィーンのユダヤ人の教育と職業構成について詳しくは、スティーヴン・ベラー（桑名映子訳）：世紀末ウィーンのユダヤ人1867-1938（刀水書房）2007、42-83頁を参照。

23) Paul Reitter: *The Anti-Journalist. Karl Kraus and Jewish Self-Fashioning in fin-de-siècle Europe.* Chicago, London 2008, pp. 5-12.

24) クラウスの自己憎悪については、テオドル・レッシングが1930年の『ユダヤ人の自己憎悪』でクラウスに言及した後、人口に膾炙した。クラウス研究においては、この「ユダヤ人の自己憎悪」解釈は的を射ていないものとして批判的に捉えられている。Reitter, *ibid.* pp. 69-106, vgl. auch Lang, a. a. O., S. 5-31.

25) Dietmar Goltschnigg (Hg.): *Karl Kraus im Urteil literarischer und publizistischer Kritik. Texte und Kontexte, Analysen und Kommentare.* Band I: 1892-1945, Berlin 2015, S. 35. 例えば「全ドイツ運動」に参加した反ユダヤ主義者リーベンフェルスは、クラウスを「アーリアゲルマン」的な「英雄的な金髪の高等人種」に属する「ユダヤ人少数派」として位置づけた。

26) Viertel: *Erinnerung an Karl Kraus.* In: *Kindheit eines Cherub.* S. 184-192, hier 184f. クラウスがウィーンのみならず各地で朗読などを行おうと計画していた1909年頃、フィアテルは、その詩才と、若い世代の詩人たちとのコネクションをクラウスにみこまれて親しくなっていく。Prager, a. a. O., S. 268f.



が、ユダヤ人や「親ユダヤ的」メディアにおいても広く用いられていた<sup>27)</sup> フィアテル自身もユダヤ的「俗物」については、クラウス論でも批判的に言及している。ただし、彼はユダヤ教への関心はすでに失っていたとはいえ、迫害される同胞への連帯感<sup>28)</sup> や、自分のユダヤ出自を強く意識しており、生涯ユダヤ共同体を脱することもなかった。フィアテルは、人種的反ユダヤ主義、文化批判的反ユダヤレトリックが跋扈するウィーンで、ときに「ユダヤ性」を自らの「病」と感じることを余儀なくされた<sup>29)</sup>

フィアテルにはユダヤ出自の者と自分を無意識に同一視する傾向が育っていった。例えば、「即物的なウィーンの真ん中でヘップ・ヘップと呼ばれたユダヤ人の少年」フィアテルは、「本能的にデュッセルドルフ出身の小さなハリー [ハイネ] を理解し、ハイネを自らの「思春期の支援者」として愛好していた<sup>30)</sup> クラウスが1910年に発表する論考で、ハイネの文体を装飾過多とみなし、文芸欄の墮落の先駆者として批判した際<sup>31)</sup> フィアテルはこれに異をとらなえた。彼は、クラウスの批判を認めたとしてもハイネのうちには「精神的行為における否認できない何か […] 歴史的洞察」が残ると言ってハイネを擁護しようとしたのだ<sup>32)</sup>

クラウス論における「ユダヤ性」の強調もこうした傾向の延長にある。だが、

27) 例えば、ドレフュス事件にあたってドレフュスを擁護する——その意味では「親ユダヤ的」と言える——『アルバイターツァイトUNG』の論説記事が、同時に「ユダヤ的寄生者」という「反ユダヤ的」レトリックを用いている。Vgl. Sigurd Paul Scheichl: Nuancen in der Sprache der Judenfeinde. In: Gerhard Botz u. a. (Hg.): Eine zerstörte Kultur. Jüdisches Leben und Antisemitismus in Wien seit dem 19. Jahrhundert. Wien 2002, S.165-186. シャイヒルは、意識的に運動形態をとった反ユダヤ主義は対象が「ユダヤ」的であるがゆえにそれに非難を向けるのに対して、文化批判的ユダヤ批判の非難はさしあたり「悪しき文明」に向けられていることを区別すべきだと論じている。それが反ユダヤ主義に転化する可能性は無視できないにせよ、文化批判的反ユダヤ言辞は、狭義の「反ユダヤ主義」とはいえない。この区別に従えば、クラウスのユダヤ批判は、文化批判的なそれに属する。

28) Ebd., S. 181f.

29) Ebd., S. 180.

30) Viertel: Harry Heine. In: Kindheit eines Cherub. S. 66-70.

31) See Reitter, *ibid.* pp. 96-105.

32) Prager, a. a. O., S. 273f.

大戦時のガリツィアでの体験がなければ、フィアテルがそれほどにクラウスのユダヤ性を積極的に強調することはなかっただろう。

### 3 ガリツィア戦線での経験

クラウスは、1911年から『ファッケル』の執筆を一人で行うようになっていた。『ファッケル』という寄稿の舞台を失ったフィアテルは、クラウスが風刺していたシュテファン・グロスマンのサークルで劇作家としての活動をはじめ、クラウスとは少し疎遠になっていく<sup>33)</sup>。そのような中、第一次大戦が勃発する。大戦はフィアテルにクラウスへの回帰とともに、ユダヤ・アイデンティティの再考を促すきっかけをあたえた。

ドイツ・オーストリアのユダヤ人の多くは「祖国」への「忠誠」を示すよい機会として開戦を歓迎し、実際、戦線ではキリスト教徒の同胞たちとの「友情」が確かめられた例も少なくなかった<sup>34)</sup>。ロシア領下のユダヤ人へのポグロムについても知られており、シオニストも含む多くのドイツ系ユダヤ人がドイツ・オーストリアのロシアとの戦争に、「ツァーリの軛」からの同胞の解放という大義を見出した<sup>35)</sup>。フィアテルも、単純に意気揚々としてはいないにせよ、「黙示録」と「カタルシス」への期待から、「新たな（ドイツ）文化」のための戦いに興奮を覚えていた<sup>36)</sup>。彼は「我々はここでまた始めるのだ。[...] 私の銃剣

33) Ebd., S. 298ff.

34) Albert Lichtblau (Hg.): Als hätten wir dazu gehört. Wien 1997, S. 121.

35) Ulrich Sieg: Jüdische Intellektuelle im Ersten Weltkrieg. Kriegserfahrungen, weltanschauliche Debatten und kulturelle Neuentwürfe. Berlin 2001, S. 196.

36) 破局を通じた再生と新生を求める「黙示録的」感情をフィアテルは多くの青年たちと共有していた。当時の雰囲気についてフィアテルは後年次のように振り返っている。「タブラ・ラサへの憧憬は広くみられ、大きなものだった。戦線でのドイツの勝利が引き起こすあらゆる多幸感にもかかわらず、戦争のほとんど全体に、世界史的悲劇の最終幕という感情が伴っていた。この悲劇は、恐怖と同情よりも恐怖と忍耐を引き起こし、その黒い結末に人はカタルシスを期待した」。Berthold Viertel: Hitler und Österreich. In: Konstantin Kaiser und Peter Roessler (Hg.): Überwindung des Übermenschen. Exilschriften. Berthold Viertel – Studienausgabe in vier Bänden, Bd. 1, Wien 1989, S. 131-137, hier S. 132.

は赤い文字を刻む。ロシア人の黒い魂へ」と、新たな出発と戦意を混ぜた詩も発表している<sup>37)</sup>

フィアテルは、しかし、従軍とともに興奮から冷める。補給部隊の予備役将校としてバルカン戦線へと招集されていたフィアテルは、そこでの敗北に意気消沈せざるを得なかった<sup>38)</sup> 同時に、フィアテルは戦場において反ユダヤ感情をまた新たに知ることとなった。ギムナジウム卒業者や大学卒業者が多かったユダヤ人は予備役将官の比較的多くを占めていて、大戦勃発後多くの将官が戦死したのにもなって大量に召集された<sup>39)</sup> その際に言語運用能力などをみこまれて事務仕事・後方支援管理を任される割合が多く——フィアテルも兵站部隊に配属されていた——、戦線膠着で士気が下がる中で「前線に出ないユダヤ人」への疑念が醸成されていた<sup>40)</sup>

ガリツィアでは、反ユダヤ感情が、当地の「不衛生」で「非文明的」な「カラスのような」ユダヤ人たちとときにぶつけられた。1915年2月、フィアテルは補給部隊の少尉としてガリツィア戦線に数名の将校と向かった。このとき彼がした体験は、自身のユダヤ・アイデンティティへの問いを深めるものであると同時に、彼の思考に「預言者」モチーフを回帰させたきっかけとして注目に値する。

将校の数名はフィアテル同様ユダヤ系で、一団のリーダーは、階級が上ではないが実際に従軍経験があったウィーンのレストラン経営者レーナーが務めていた。

我々は目下のところレーナー中尉の部下となっていたが、このことで我々

37) Berthold Viertel: Plänkler. In: Konstantin Kaiser (Hg.): Das graue Tuch. Gedichte. Berthold Viertel – Studienausgabe in vier Bänden, Bd. 3, Wien 1994, S. 52.

38) フィアテルらは「シラミにつかれ埃にまみれ […] セルビア人とチフスに追われながら」行われた、惨めなまでに非英雄的な「むちゃくちゃな退却」で憔悴した。Viertel: Heimkehr. In: Kindheit eines Cherub. S. 184.

39) Lichtblau: Als hätten wir dazu gehört. S. 121.

40) Erwin A. Schmidl: Habsburgs jüdische Soldaten 1788-1918. Wien 2014, S. 96f.

が彼に優越感を抱くことは妨げられなかった。彼は非常にしばしば我々の繊細な感情を害した。特に彼が、我々の笑いを常に誘うわけではない、絶え間ない冗談を言うときにそうだった。この太って粗野な男は、彼の我慢強い馬を拍車で刺激し、たいした理由もなくあちこちへと鞭を打った<sup>41)</sup>

「ウィーンののんびり屋であり、かつ状況次第では情け容赦ない輩でもある」このレーナーは、ある日道で出くわした、カフタン姿の老ユダヤ人の帽子を叩き飛ばす。これに怒りを覚えたフィアテルの抗議をレーナーはいなす。

彼はくつろいだ風に、「だけど、なあ君、ユダヤ人のことにすぎないじゃないか。君自身もユダヤ人だから怒っているんだろう。君は、君の人種のことですら恥を感じるんだろう。だが、君は教養あるユダヤ人だということを忘れるなよ。君は我々アリア人に属する者だ」。彼は目で笑って、皆の方へ誘うように横目を向けた。／誰も笑っていなかった。皆が私を凝視していた<sup>42)</sup>

フィアテルは「私はユダヤ人であることにはなく、オーストリアの将官であることに恥を感じる」と食い下がって、レーナーに老人への謝罪を求めるが、彼は反対に上官として、「そんなに繊細な感性をお持ちなら、自ら謝罪にいけ」と命じる。フィアテルは戻って老人に声をかける。

私は族長や預言者を引き合いに出そうとは思わない。[...] 老人の顔からはいずれにせよ、作為のない尊厳と、わざとらしくない権威の言葉が語り出された。[...] 「あなたは何をお望みです？ 人々は狂っています。彼らが理性とともにあるのだとしたら、彼らはこんな戦争をするでしょう

41) Viertel : Der alte Jude. In : Kindheit eines Cherub. S. 170-173, hier S. 171.

42) Ebd., S. 172.

か?」<sup>43)</sup>

この回想は、ナチス・ドイツがオーストリアを併合した後に発表されている。第一次大戦時には「アーリア人に属する者」に入れられていたフィアテルを含む多くのユダヤ系ドイツ人、オーストリア人が、ナチズムの下では「老ユダヤ人」と同じ「ユダヤ人種」へと算入され、「二級市民」として扱われていることを、この回想を執筆した時点のフィアテルは知っている。フィアテルは、自分も組み入れられることになる「ユダヤ人」の視点から、「老ユダヤ人」の声をかりて、「アーリア人」の野蛮と狂気を批判しており、ここには「理想化された対抗神話」の性格も指摘できるだろう<sup>44)</sup> いずれにせよこれに類する出来事をフィアテルは体験したのだろうし、彼が自分には直接差別が向かってこないからといって、同胞への迫害に無頓着であったことはないだろう。東方ユダヤ人も含めた同胞へのシンパシーが強まることなしには、彼がクラウスの「ユダヤ性」を強調することもなかっただろう。

#### 4 戦時下の『カール・クラウス』

1915年3月以来全域がロシアに占領されていたガリツィアは、1915年6月末には、再びオーストリアの統治下に入り、オーストリア軍はその後のロシア軍の攻勢を抑えた。オーストリア軍は、スパイなどの嫌疑で民間人を裁判なしに処刑する蛮行を常態化させ、兵士の間では不安と生活の乱れから自暴自棄の雰囲気広がっていた<sup>45)</sup> フィアテルはこの状況を嫌悪し、また、同時に東方ユダヤ人の貧しい状況、少女売春までびこる惨状をみて、彼の「ユダヤ感情は深く傷ついた」<sup>46)</sup>

43) Ebd., S. 173.

44) Prager, a. a. O., S. 322.

45) Ebd., S. 326.

46) Ebd., S. 324.

クラウスは当初戦争について沈黙していたが、1914年11月に朗読会を開催し、「大いなる時代」の到来に熱狂する戦争礼賛言説を風刺し、1915年夏からは『ファッケル』を発刊し、風刺活動を再開する。1915年11月、働きを認められて中尉に昇進し事務仕事に従事していたフィアテルは、読書と執筆の時間を得ていた<sup>47)</sup> 良心の痛む中手にとった『ファッケル』にフィアテルは感銘を受け、その感想は友人を介してクラウスに伝わった<sup>48)</sup> クラウスは1916年5月の『ファッケル』でフィアテルについて、「戦争詩を書くに至った者、しかし次いで、塹壕詩の英雄性よりもよりよい英雄性を示す一つの行為を通じて告白に至った者を尊重しないという権利は私にはない」と、フィアテルの改心を讃えた<sup>49)</sup> これを受けて、フィアテルは「東ガリツィアの、100頭以上もの馬と共に共有した木造バラック」でこのクラウス論を書きあげた<sup>50)</sup>

比較的長いこのエッセイを、フィアテルは自らの記憶を織り交ぜながら、ウィーンでのクラウスの風刺活動の性格付けから書き始めている。「反対屋」としてのクラウスは、批判すべき周囲の腐敗を映し出す「時代の鏡」であり、「イエスマン根性」が何の答えにもならない「イエス」を蔓延らせる状況に、異論を叫ぶ<sup>51)</sup> 「繊細な刺激を楽しみながらも脳は空っぽで、心は粗野」な同時代人たちは「知的に生まれついているから、よりよく全てを知るために、これ以上何かを感じ取る必要などない」と錯覚しているが、クラウスはこうした自己満足を嘲笑する<sup>52)</sup>

フィアテルは、しかし、クラウスの批判がそれ自体高潔なものであるように描かず、対象への執拗な攻撃、復讐心といったクラウスの「ネガティヴ」な要素と関係づけていく。攻撃性と残酷さはクラウスと切り離せない<sup>53)</sup> フィア

---

47) Ebd., S. 328.

48) Ebd., S. 276.

49) Die Fackel. Nr. 423-425 (1916), S. 23.

50) Viertel : Heimkehr. a. a. O., S. 184.

51) Viertel : Karl Kraus. 7ff.

52) Ebd., S. 20.

テルは、こうした要素が、預言者としてのクラウスに不可欠のものであることを強調する。こうした議論を進めるにあたって彼に指針を与えたのはマルティン・ブーバー（1878-1965）であった。

当時ブーバーは、ユダヤ精神の再興をよびかけていた。各地に分散したユダヤ人たちは、「血の共同性 *Gemeinschaft des Blutes*」と「世代の鎖」によって、ユダヤ精神にまだつなぎとめられており、その再興は可能だとブーバーは訴える<sup>54)</sup>。ニーチェなどを彷彿とさせる世紀末以来のネオ・ロマン主義的比喩でブルジョア世界からの離反とユダヤ精神への回帰を語ることで、ブーバーは、ユダヤ教への込み入った知識のない読者にも「ユダヤ体験」をしたように思わせる力を得ていた<sup>55)</sup>。ブーバーの議論はこの意味で、特別にユダヤ文化への造詣があったわけではないフィアテルにとっても理解しやすいものだったと思われる。次節では、フィアテルが、いかにブーバーの議論を咀嚼し、クラウスの預言者性を提示したのかを検討しよう。

## 5 要求のパトスと呪いの預言者

ユダヤ教の神は嫉妬し、復讐する神であり、キリスト教における隣人愛とは無縁である——こうしたクリシェを逆手にとるように、フィアテルはクラウスの「復讐心」を批判的預言者の相貌へと昇華させていく。神殿崩壊後、捕囚の中で神とのつながりを失って、ユダヤ人たちは罪に陥っている——こうした状況を憂い神への立ち返りを要求する預言者イェレミアにフィアテルは言及する。イェレミアの精神を受け継ぐ「神の戦士」は、罪ある者を罰し、神へと

53) クラウスの風刺の成功要因が、人々が欲する「残酷さに満足を与えたこと」にあったと同時代人に指摘されている。Robert Scheu: Karl Kraus. Wien 1909, S. 8. 青年期にクラウスに心酔していたエリアス・カネッティも、クラウス賛美者たちの間に、クラウスが「裁き」を下すことにサディスティックな喜びを覚える「迫害群衆」を見出していた。Elias Canetti: Das Gewissen der Worte. Essays. Frankfurt am Main 1981, S. 44f.

54) Sieg, a. a. O., S. 47.

55) Ebd., S. 49.

目を向ける。

この戦士は、民族の孤立無援の状況にあつて、精神の行為者、暴力犯に完全に成りかわり、赤熱する情熱で身を満たし、「要求のパトス」(ブーバー)に熱狂した。ユダヤ人たちにおいては、地上で最高の職務を担ったのは、罰を与え、復讐を果たす精神だったのだ<sup>56)</sup>

フィアテルは、クラウスを、「罰を与え、復讐を果たす精神」の体現者として見ていくのだが、それについて見る前にここで言及されるブーバーの「要求のパトス」について概観しておこう。

フィアテルが参照した「東洋の精神とユダヤ教 *Der Geist des Orients und das Judentum*」<sup>57)</sup>においてブーバーは、東洋精神にみられる「要求のパトス」とユダヤ人の「改心」の関係を論じている。これがフィアテルに大きな意味をもった。要求のパトスとは、仮象的にみえる現象世界の背後にある「統一された真の世界」の実現を求める情熱を指している<sup>58)</sup>。西洋的な精神が観照と対象の客観的統御に向かうのに対し、東洋的精神は、主体的な世界把握と真の統一という「課題」の実践に向かう。

ブーバーは、阻まれた世界の統一を求める「要求のパトスがもっとも強力な集中性を得ている」のはユダヤ人においてだと語る<sup>59)</sup>「ユダヤ人は世界の分裂を、[...]インド人のように、世界と認識主体との関係においてとらえない。[...]ユダヤ人は、世界の分裂を、他の何においてでもなく自分自身のうちで、自分

56) Viertel: Karl Kraus. S. 54.

57) フィアテルが引用しているのは、ブーバーの講演をまとめた1916年の『ユダヤ教の精神について』に収録されたものである。本論では全集から引用する。Martin Buber: *Der Geist des Orients und das Judentum*. In: David Groiser (Hg.): *Martin Buber Werkausgabe*. Bd. 2.1. *Mythos und Mystik. Frühe religionswissenschaftliche Schriften*. Göttingen 2001, S. 187-203.

58) 「人間の課題とは、真の世界を現実の世界とすることである。ここにおいて東洋的なものの動的性格が、高次に昇華された形で、要求のパトスとして現れてくる」。Ebd., S. 190.

59) Ebd., S. 194.



自身の自我の分裂として体験する。[…] 神の意志へと招かれていると感じながらも、彼自身は妨害と反抗のうちに埋め込まれている。人間は自らを途方もない矛盾の舞台として体験する。[…] 人間は世界の分裂の担い手であり、自由から不自由へ、統一から分裂へと転落する世界の運命として自らを体験する」<sup>60)</sup>

こうした分裂は、個々のユダヤ人内部にあるとともに、民族全体が歴史的に抱えてきたものでもある。神意を得たモーセから民は離反し、神殿崩壊後に神を忘れた民は、神への立ち返りを説く預言者に耳を貸さなかった。律法の農耕的性格はディアスポラの中で失われ、現代のユダヤ人は散逸状況で共同性を失っている。「分裂」を看取する者は、あるべき統一を回復するための「改心」を「決断」しなければならない<sup>61)</sup> 彼にはまた、異教の神々になびく者たちとの闘争が求められる。「イスラエルの預言者と教師の特殊な創造性は、バールの奉仕者との闘いの中でいつも燃え上がる。彼らの創造性は闘争の創造性であり、ユダヤ的な実り豊かさとは闘争的な実り豊かさである」<sup>62)</sup>

フィアテルは、ブーバーのこの議論を援用して、クラウスの風刺活動を、現代の「バールの奉仕者」に「改心」を要求する闘争として把握する。「擬似ユダヤ的野心」にかられた「ユダヤ同胞」は「良心の咎めを知らない利得追求者」になり世俗的成功をおさめたが、彼らは「魂の破産」に瀕している。こうした「ユダヤ人の罪」は、クラウスを苦しめ、彼の預言者のパトスに火をつける<sup>63)</sup> この闘争者の精神は、隣人愛を説く慈愛の精神ではなく、災いを予告して罪の悔い改めを説く。

60) Ebd., S. 193.

61) 「テシユバ Teshuba. つまり改心——決断行為の究極の高まりはこう呼ばれる」。Ebd., S. 195. この「改心」は、『申命記』(4・30)や『エゼキエル書』(33・11)にみられるように「神への立ち返り」「(悪から)心を翻すこと」を指している。

62) Ebd., S. 199.

63) Viertel : Karl Kraus. S. 58.

我々には、今日再び、神殿崩壊時に預言者が示した合図を見極めることができる。我々はふたたびこの純粹さ、權威、そして悲劇性を予感している。我々はふたたび、太古の、最後の審判が告げた怒りの祝福を渴望している。世界の没落、この黙示録の中で啓示される創造の力を前にして、小さくはかない人間は悔い改めるしかない。人が安寧と生活を保持する才覚を楽しむことはかくも醜いのか！ 祈りがあるとすればこうだ。来れ、ついには文化の廢墟に精神を打ち立てる神よ、純なるものから不純を取り除くことに憐れみなどかけるな！ メシア的理想は、鉄の種苗、火の種苗、血と涙の種苗に宿っている<sup>64)</sup>

クラウスにおいて「メシア的理想」は、「呪いという偉大な伝統」において保持されているとフィアテルは考えている。それは「怒りと罵りのオルガスム」とともに頭をもたげ、復讐心と災いの予言は熱狂をまきおこし、「古い神殿」の廢墟のかけらは、クラウスの言葉となって空虚な時代へと舞い込む。「疑いようもない。カール・クラウスは大ユダヤ人の一人なのだ」<sup>65)</sup>

フィアテルはこうして、クラウスがユダヤ的な災いの預言者のパトスをもって、墮落した「擬似ユダヤの本質を克服した」ことを強調する<sup>66)</sup>クラウスのユダヤ・ジャーナリズム、ユダヤ的利得追求の批判を、反ユダヤ的姿勢から来たというよりも、真にユダヤ的な「要求のパトス」から説明するのである。

## 6 「ユダヤ的」「預言者」としてのクラウス？

フィアテルの「ユダヤ精神」によるクラウス解釈は、すぐに反発を招いた。1920年、レオポルト・リーグラー（1882-1949）<sup>67)</sup>は、当時もっとも大部の二

---

64) Ebd., S. 54.

65) Ebd., S. 56.

66) Ebd., S. 58.

巻本のクラウス論を公刊し、そこでフィアテルのクラウス解釈を批判する。

「ユダヤ的新オーストリア」がウィーンを退廃させたと考えるリーグレーは、クラウスの特質をユダヤ性から説明しようとすることに反対であり、クラウスが「純粹なる人間性」へといたるために「ユダヤ性」を克服してきたと強調する<sup>68)</sup>。リーグレーは、クラウスにあるのは「二元性」の調和だと主張し、フィアテルが「分裂」の「逆説」を語ることに疑問を投げかける<sup>69)</sup>。自己分裂の中で、「理想性の地盤にいたろうとすること」をフィアテルはユダヤ的パトスと結びつけたが、「こうしたエートスは、特別にユダヤ的なものなのだろうか？あるいはさらに、「原ユダヤ的理想性」なのだろうか？ そのようなものは存在するのか？」<sup>70)</sup>

フィアテルは、この批判ののちに、クラウス論を書籍として出版しているが、見解は改めておらず、「時代を超えた大ユダヤ人」としてのクラウスを描き出すところが、自著の一つの頂点であると語っている<sup>71)</sup>。フィアテルにとっては、クラウスの客観的把握よりも、フィアテル自身の「自己救出」が重要だった<sup>72)</sup>。自己内の葛藤と分裂は、フィアテルにとって紛れもない真実としてあったがゆえに、リーグレーの批判は響くところもなかったのだろう。ただ、リーグレーの問いに答えるためにも、フィアテルの描くクラウスがどういった点で「ユダヤ的」と言い得るかを、以下でさらに検討しよう。

67) リーグレーは、フィアテル同様クラウスの友人で、文芸史家。ウィーンの貧しい家庭に生まれ独学する。1914年からオーストリア・学術アカデミーの簿記・出納係を務めていた。Vgl. Wilhelm Kosch, Heinz Rupp und Carl Ludwig Lang (Hg.): Deutsches Literatur-Lexikon. Biographisch-Bibliographisches Handbuch. Bd. 9, Bern 1986, S. 1407. リーグレーは、カトリック信者だったと考えられる。Timms: Karl Kraus, p. 574. ちなみにクラウスは1911年にカトリック教会に入信しているが、1922年に脱会するまでは公にしておらず、フィアテルもこれについては知らなかったと考えられる。

68) Leopold Liegler: Karl Kraus und sein Werk. Wien 1920, S. 86f.

69) 「クラウスにとっては精神と官能、倫理と美学、そしてこういいたければ東洋と西洋も、分解のできない人間的なまとまりをなしていた」。Ebd., S. 148.

70) Ebd., S. 151.

71) Viertel: Karl Kraus. S. 89.

72) Ebd., S. 83.

まずは、A・ラングが問題にしたように、クラウスに指摘されながらも十分にその意味を検討されていない「預言」的なものがなにを指すのかを明らかにしなければならない<sup>73)</sup> フィアテルがクラウス論を執筆していたちょうどその頃、主にドイツのプロテスタント神学とヘルマン・コーヘンやその影響を受けたラビたちの間でユダヤ教における預言者の意義が論争になっていた。プロテスタントの側には、旧約の預言者の精神が原始キリスト教に継承され、その後ルター、カルヴァンを経てプロテスタントの精神に生きているという大きな了解（「グランドセオリー」）があった<sup>74)</sup> 個人と神とが向き合う点で、旧約の預言者には、プロテスタンティズムに通じるものが看取されていた。マックス・ヴェーバーもこうした枠組みで思考しており、「後期ユダヤ教」の律法主義やモーセなどにみられる「魔術性」には関心を寄せず『古代ユダヤ教』における預言者の精神に、ユダヤ教の大きな意義を見出している<sup>75)</sup>

こうしたプロテスタントの理解に呼応する形で、ユダヤ教の側では、19世紀をつうじて、タルムード解釈と律法主義を核とする「後期ユダヤ教」的性格を薄めて、旧約の預言者の倫理性を強調していった。カント的倫理とユダヤの正義を両立するものとしたヘルマン・コーヘンの議論も、プロテスタンティズムに対するユダヤ側からの呼応の動きとして理解できる。ここではユダヤの預言者は神を介して普遍的倫理への回路を切り開くものとして理解できる。しかしこれにエルンスト・トレルチが反対を表明する。彼は、1916年に発表した『ヘブライ人預言者のエートス』において、歴史的に把握するなら、預言者の倫理は小規模ノマドたちの倫理性であって、普遍的人間性にはいたらないと論じて論争になっている<sup>76)</sup> 預言者が告げるのが、民族の使命であるのか、民族の枠を超えた普遍的な使命なのかというこの論点は、ユダヤ人は人種の枠に閉ざされているのか、あるいは普遍的使命に参与し得るのかという問いも投げか

73) Lang, a. a. O., S. 33.

74) 上山安敏：宗教と科学——ユダヤ教とキリスト教の間（岩波書店）2005，138頁。

75) 同上 123-208頁参照

76) Sieg, a. a. O., S. 217-231. 参照。

ける重要なものであった。

フィアテルは、こうした論争はおそらく知らず、それゆえ、自覚的な答えをもってはいなかったと思われるが、彼のクラウス像は、ヴェーバーが預言者の社会的地位を論じた際の考察に合致するところがある。災いを告げる旧約の預言者は、原始キリスト教団に見られるような同胞性をもたないがゆえに利害関係を超越してラディカルなメッセージを発することが可能になったとヴェーバーは分析している<sup>77)</sup>。預言者の声は孤独ゆえに悲痛、憂鬱、絶望のトーンを帯びるが、フィアテルのクラウス理解もこれに通じている。ただし、旧約の預言者とは違って、クラウスの声はユダヤ民族に向けられるものではない。

クラウスの憎悪は自らの民にのみ向けられるわけではない。クラウスは、罪深い「時代のあらゆる子供、ユダヤ人、非ユダヤ人に憎悪を分配する」<sup>78)</sup> 神意を預かるモーセに反逆する「コラの徒党」は、クラウスにとって、ユダヤ人のみならず「西洋のあらゆる民族」のうち存在している<sup>79)</sup>。クラウスには、またブーバーと違って「理想的共同体」と「精神的移住」への志向は見出されない<sup>80)</sup>。クラウスは民族の使命を告げることはない。フィアテルは、クラウスが「いかなる人種にも拒まれることのなかったあのより高き状態を、人種の内部で保持し」ているとみている<sup>81)</sup>。クラウスの言葉も、ユダヤ的特質の内部から生まれてくるものと把握され、ユダヤ人種に閉ざされるものではなく、「普遍的生の果実」たりうるとフィアテルは考える<sup>82)</sup>。

クラウスはすべての人々に、遍く広がる悪からの立ち返りを要求する。この改心の要求が第一次大戦においてクライマックスに達したと、フィアテルは見ていた。エッセイの最後の節は、大戦をめぐってのクラウスの言説への論評と

77) マックス・ウェーバー (内田芳明訳) : 古代ユダヤ教 (岩波書店) 1996, 270-276 頁参照。

78) Viertel : Karl Kraus. S. 60.

79) Ebd., S. 89.

80) Ebd., S. 60.

81) Ebd., S. 63.

82) Ebd., S. 62.

なっている。

クラウスがその葛藤と孤独の中で挙げる声に、フィアテルは瞠目している。フィアテルは戦場で、「強制と義務とが一つとなる男らしさという最悪の戦列」に連なり、それが日々無数の困窮と犠牲を前線と後背地とに要求するものだというのを知った。おびたしい兵士と民間人の犠牲から利益をえながら、ほくそ笑む者が存在することも悟った。戦線に出なかったクラウスがこうしたメカニズムを見通していたことに驚嘆しながら、フィアテルは、クラウスにその仕事をやり遂げる責任を要求している。

カール・クラウスがそのライフワーク [『ファッケル』] を賭すること自体は、何も意味しない。だが、彼がうそごまかしの浪費なしに、つまりそれがそこで無と怒りに溶けてなくなることなく、殉教に反対し、何千もの犠牲に反対し、まぎれもない世界の没落に反対して、彼のライフワークを動員することができるなら、それはすべてを意味する。後背地に群がって利得を貪り、言葉を食い物にする者たちの群れに対して、言葉の吸血鬼、金銭の吸血鬼の群れに対して、また諸々の地獄に対して責任などもつ必要はない。今日まだ立ち上がって戯れ言と芸術とを繰り出す被造物[クラウス]は、国家や社会の諸勢力への責任などもたず、何千もの匿名の死を前にして造物主への責任をもたねばならない！<sup>83)</sup>

ここでクラウスが責任を負っている「造物主」は、もはやユダヤ民族の神ではなく、世界全体の行く末を見守る神であろう。クラウスは、預言者あるいは黙示家として現れ、裁かれるべき罪を告発している。来たるべき秩序については、クラウスもフィアテルも知らない。勝利者が誰だろうとも、どのような講和がなされるのだとしても、フィアテルは次のように、あらかじめ書き記して

---

83) Ebd., S. 79.

おかねばならなかった。「神に負かされた者としてでなく […] 現れる勝利者に災いあれ！ 新生 *Erneuerung* のための基盤であることなしに、地上の大地を征服する講和に災いあれ！」<sup>84)</sup>

## お わ り に

神を前にした「改心」を経て、ヨーロッパは「新生」を必要としている。このことだけは、フィアテルには確実に思われていた。彼にとって、クラウスは人々の罪状をあらため、「改心」を要求する預言者である。リーグラの問いに立ち戻ると、フィアテルは果たしてこのクラウスを「ユダヤ的」といわなければならなかっただろうか？ クラウス自身の活動を検討するだけであれば、彼は必ずしもユダヤ的と言う必要はなかっただろう。個人が矛盾に引き裂かれること、葛藤の末に道を引き返すことをユダヤ的という必然性はない。

「ユダヤ性」の強調は、クラウスの風刺活動の意義を語る上では、必ずしも必要ではなかったかもしれない。だが、現代の「病」あるいは現代に取り残された遺物のようにみられている「ユダヤ性」が、その精神性をたどるなら、「改心」を通じた普遍的な正義の要求にいたりうる——こうした考えは、葛藤のうちにあったユダヤ人としてのフィアテルを鼓舞するものであっただろう。「ディアスポラという代価を払っても没落を免れようとした」この民の運命を語りながら、フィアテルは彼らが単に生き延びてきただけでなく、「ユダヤ的な理想性と預言が常に新たに燃え盛り、絶えることない精神的使命 *das nicht erloschene geistige Mission* を証してきた」と宣言している<sup>85)</sup> ラングも指摘するように、ここにはキリスト教的な福音を知らせるべしという「使命」の思想が混入している<sup>86)</sup> フィアテルのいうユダヤ的的使命は、ちょうどプロテスタンティ

84) Ebd., S. 80.

85) Ebd., S. 60.

86) Lang, a. a. O., S. 35.

ズムが密かに古代ユダヤ教の預言者を導きいれたように、ユダヤ性にキリスト教的なものを導きいれているともいえる。その意味で、リーグレーの言うのとは違った意味でだが、やはり「ユダヤ性」を言う必然性があったのかという疑念は残る。

ところで、当時の状況においては、フィアテルがクラウスのユダヤ性を強調しブーバーを援用して解釈したことは、ユダヤ系知識人として一步踏み込んだ立場を表明することを意味した。クラウスのユダヤ性をポジティブに語ることは、それだけですでに政治的な含意をもって、受け止められたと考えられる。当時のブーバーは「東方ユダヤ人文化」に、生き生きとしたユダヤ精神の再興の鍵があると主張してもっとも成功した作家であり、政治的には、「東方委員会」に関わって、ロシアからのユダヤ難民をドイツやウィーンへと編入する動きを支援していた<sup>87)</sup> 同化ユダヤ人たちには、そもそもブーバーらがユダヤ的特性を賞賛することさえ、自分たちの捨て去ろうとしているメルクマールをわざわざ目立たせる迷惑な行為とうつり、なかならず東方ユダヤ人の受け入れは反ユダヤ主義に恰好の材料を与える恐ろしい愚策と映った<sup>88)</sup>

こうした布置において、フィアテルは東方ユダヤ人も包摂した新たな秩序の「新生」に与する側に位置する。本論では触れられなかったが、ハシディズムの言語観とクラウスのそれを類比することで、フィアテルは東方ユダヤ精神とのつながりも示唆している<sup>89)</sup> 「新生」の必要を叫ぶフィアテルの念頭には、東方的ユダヤ精神を通じた新生ということも浮かんでいたかもしれない。

クラウス自身は、フィアテルの議論については、『ファッケル』では何も言及していない。だが、批判してはならず、何らかの訂正を求めてもいない。クラウスにも、フィアテルにとって「ユダヤ性」を論ずることが大きな意義をもったことは理解されたのではないと思われる。大戦後ドレスデンやベルリンで

---

87) Sieg, a. a. O., S. 195-199.

88) Vgl. ebd., S. 199-205.

89) Viertel : Karl Kraus. S. 61f.



活動したフィアテルとクラウスの関係は良好で、20年代にはクラウスの『夢作品』や『克復されざるもの』をフィアテルが演出・上演するなど、二人の間では協力関係が成立している。フィアテルが作り出したクラウスとイエーリングらベルリンの左翼知識人とのネットワークは、やがてブレヒトとクラウスを結び、それがベンヤミンにクラウスについての重要なエッセイを書かせるきっかけにもなったと考えられる。実際、ベンヤミンはフィアテルについては好意的な言及を残している。大戦後のフィアテルの動向を理解することで、クラウスやベンヤミンについても新たな視野から検討することが可能になるだろう。

本稿は2018年度に交付を受けた松山大学特別研究助成による研究成果の一部である。